

⑥ 横浜市民の国際交流活動

八木沢直治

一——「与えられた国際化」から
「主体的な国際化」へ

新聞やテレビには、海外のニュースが大きなウェイトを占めて、毎日私たちに伝えられている。また、果物や野菜なども海外から輸入されたものが多く、現在の私たちの生活は海外とのつながりを無視しては成り立たない。一方、工業製品をはじめ、年間四〇〇万人といわれる日本人旅行者、海外進出企業、海外投資など日本からも海外に向けて多くの物、人、情報などが出されている。現在ほど日本が国際的な相互依存関係の中に組み込まれたことは、かつてなかったといつてよい。したがって日本にとって現在ほど海外諸国との友好関係の重要性が叫ばれる時代もなかったといえる。

されているバナナの九割はフィリピン産のバナナである。アメリカと日本の大資本が、フィリピンのミンダナオ島に広大なバナナ農園を経営し、ここで生産されるバナナのほとんどが日本に輸入されているという。日本に輸入されたバナナは、流通機構を通して全国津々浦々のスーパーや八百屋さんまで運ばれ、食卓に並べられる。しかし、このバナナの輸入量や値段を決めることに携わっているのは、ほんの一握りの人々なのである。このことは、日本から輸出されるVTR、自動車や、そのほとんどを輸入にたよっている石油、鉄鉱石などの天然資源ばかりでなく、海外のニュースなどの情報にいたるまでほんの少数の人たちによって、その内容が決められているのである。そして、このような仕組みが出来上がっているために、何もせずに居ながらにして、私たちは海外からの物や情報を受け取り「与えられた国際化」の中で日々の生活を送ることが出来るともいえる

わけである。一方、このことは逆に私たちが海外の人々と直接触れ合い、交流しなくても生活できるということであり、一般市民にとり国際交流を縁遠いものにしていくのもまた事実なのである。

しかし、国際的な相互依存関係の網の目が広くかつ深く私たちの生活を被うにしたい、国際的な事件や国家の外交政策が私たちの生活を左右することが多くなりつつある。こうした状況のなかで、徐々にではあるが「与えられた国際化」から、私たち一人一人が国際化のあり方を問い、国際化の方向を決定するような状況も生まれてくる。また、一般の市民が、自ら国際交流に乗り出すようにもなってくるのである。そして、このようにして、「与えられた国際化」に安住している時には、直接に触れ合わなくてもよかつた多くの日本人市民と海外の市民との間に交流が生まれ、お互いの信頼を築くための交流がどんどん行われるようになってきた。このように、現代は市民レ

ベルの国際交流の時代であり、現代という時代が市民レベルの国際交流を要請しているともいえるのである。

二——横浜の国際性の二重の意味

① 港と貿易に特徴づけられた国際性と市民レベルの国際性

横浜が海外との交流を行うようになってきたきっかけは、いままで述べてきたような、現代という時代が要請する国際化ではもちろんなかった。一寒村にすぎなかつた横浜が、江戸幕府の外交政策により、強制的に欧米列強国との交流の窓口として一八五九年(安政六年)六月二日港を開いたことがその始まりであった。その後横浜は港と貿易により発展し、その歴史と伝統は国際性に色どられ、横浜から国際性をとつたら、横浜らしさが失われてしまふまでになったのである。つまり横浜のアイデンティティがまさに国際性にあるということなのである。そして

- 一——「与えられた国際化」から「主体的な国際化」へ
- 二——横浜の国際性の二重の意味
- 三——市民グループの活動

この国際性は、「港と貿易によって特徴づけられた」ものといつていいだろう。

一方、現代が市民レベルの国際化の時代であるということから来る国際性もまた、横浜は持っている。そういう意味において、横浜の国際性は二重の意味を持っているということができるのである。

問題は、「港と貿易によって特徴づけられた国際性」と現代の「市民レベルの国際性」の間に矛盾・対立があるのかなのかということである。「港と貿易に特徴づけられる国際性」についてい

と、やはり貿易が中心を占め、経済的利益を重視した経済交流主導型の国際交流という側面を持つことになる。また、港という性格は外に開かれており、外国人や外国文化に対しても開放的で、進取の気風に富んでいるともいえる。一方、「市民レベルの国際性」では、外国の人々との相互信頼が重要となるから、経済主導型に対して相互信頼型の国際交流に重点が置かれることになる。そのためには、

まず異なった文化を持つ人々が同じ人間として対等な立場で共感し合い、お互いを正しく理解しようとする姿勢がなければならぬ。そして、正しい理解の上に立って共に協力し合う関係を結ぶことを通じて、信頼を培っていくことこそ、「市民レベルの国際交流」のねらいであるといえよう。また、信頼関係が結ばれるた

めには、自分たちの地域文化を大切にしなければならぬし、しかも海外に対して閉鎖的にならず開放的でなければならぬ。

このように、二つの国際性の間には共通の部分もあると同時に、異質な面も持つことになる。そして戦後の横浜の国際交流は、この二つの国際性が共存する時代だといつてよいのである。

② 戦後の横浜の対外交流

市長室長外岡勲氏の「横浜の対外交流」をもとに戦後の横浜の対外交流を概括してみよう(表1-3)。

戦後の横浜の対外交流を大きく三つの時期に分けている。まず、戦後の壊滅的な状況からの再出発を、地場産業の振興という形で国際化に求めた摸索期(終戦から一九六五年まで)。次に、サンデイエゴ、リヨン、ボンベイ、オデッサ、バンクーバー、マニラの六つの姉妹都市を中心に地場産業の発展を図るとともに、文化交流も盛んに行われた基本形成期(一九六五年から一九七九年まで)。

最後に経済交流・文化交流が華やかに展開され国際活動の場の整備や、市民による交流も活発化し、交流地域がアジア地域から環太平洋地域へと、発展しつつある発展期(一九七九年から現在まで)である。

戦後の横浜の対外交流を概括していえることは、終戦から一九七〇年代の半ばにかけて展開された国際交流は、文化交流が行われているものの、経済交流が主流を占め、交流の主体は主に行政と民間企業であった。つまり経済主導型の国際交流といえるのではないか。それは、戦後の壊滅的な状態からの再出発に当たって地場産業の振興を海外との交流に求めたことから当然の帰結ともいえる。また、一九七四年に設置された国際交流課が経済局に置かれたことも無関係ではないだろう。さらに一九七四年、「卓球はアジアを結ぶ」というスローガンのもとに三〇カ国・地域から約四〇〇人の選手が参加し、アジアの友好の祭典となつたアジア卓球選手権大会の開催にも、対米一辺倒であつた横浜の経済活動をアジアにもふり向けるべく、この大会を通じて経済交流への足がかりをつけようとする意図が認められる。

ようやく一九七〇年代半ば以降になつて、相互の信頼を重要視した交流が行われるようになる。一九七九年、友好都市上海市で開催された自治体初の見本市「日本・横浜工業展覧会」には、おりからの中国ブームも手伝って横浜の多くの企業が参加し、約五億円のぼる商談が成立した。このような大きな成果をおさめることができたのは中国の四つの近代

化に貢献するための工業製品が厳選され出展、単なる経済交流以上に経済的交流を通して、中国の国造りに協力しようとする基本姿勢が横浜側にあつたからといえよう。

また一九八三年に横浜で開催された「アジア太平洋地域における自治体の都市づくりに関する横浜国際会議」(YLAAP)の横浜宣言には、都市間の相互理解と信頼を築くことにより、ひいては世界の平和に貢献していこうということが唱えられている。

このように、横浜においては、一九七〇年半ば頃からようやく、お互いの信頼を基本にすえた相互信頼型の交流の必要性が認識され、徐々にではあるが実践に移されるようになってきたといえる。こうして現在の横浜は、経済主導型の国際交流から相互信頼型の国際交流へと発展する過程にあり、行政や民間企業だけでなく、一般の市民一人一人が国際交流の主体として成長しつつある時期にきているといえよう。

明治後期、日本の資本主義が商業資本から産業資本へと転化する時、横浜は依然として商業資本に留まっていたことが、その後の横浜の発展の大きな障害要因となつたと外岡氏は前掲著書の中で述べておられる。現在、時代の趨勢が大きく変わろうとしている中で、横浜の伝

統的な国際性は時代の要請する国際性へと変化を遂げていくことこそ、歴史上の過ちを二度と繰り返さないためにも必要なことであるといえよう。

三——市民グループの活動

市民の国際的な活動を知るうえで市民グループの活動は非常に参考になる。一九八四年勸横浜市海外交流協会（YOK E）により市民グループのリーダー七九人（男四五人、女三四人）を対象に行われた調査報告書「横浜の中の世界・世界の中の横浜」をもとに横浜における市民グループの活動を紹介することにした。

①活動の内容

横浜の国際交流市民グループはどのような活動を行っているのか。表一がその調査結果である。

これを見てまず気付くことは、海外の生活事情や文化について理解を深める講演会、在浜外国人との友好を深める交流会やパーティーなど相互理解と友好を目的とした活動が七三グループで全体の約六七%を占め圧倒的に多いことがわかる。次に、在日留学生に対する世話や奨学金などの援助、チャリティー・コンサートの益金の寄附などの援助活動が三〇グループで全体の約二七・五%である。反核

・平和、政治犯の釈放を求める人権擁護の活動は、わずかに六グループで全体の五・五%にすぎない。さらに詳しく見ると相互理解・友好親善を目的とした交流の中でも、海外事情、生活、文化などを理解しようとする活動（国際理解のための各種講座、講演会、映画会など、海外に

ついての勉強会、海外派遣、スタディー・ツアー）が、四一グループもあり、相互理解・友好を目的とした活動全体のうち半分以上を占めている。しかもアジアに関心を持つグループが多いことも注目される（一三グループ）。また在浜外国人とのパーティー・交流会や文通など（外国人との交流会やパーティー、ホームステイホーム・ビジット、文通）の友好を深める活動は、二二グループで三〇%を占める。一方、相互理解のもう一つの側面である、日本を海外の人々に知らせようとする活動（日本体験交流、日本文化紹介）はわずか一〇グループで、海外の事情を理解しようとする活動と比べて約五分の一にすぎない。相手を知ることとは大切なことではあるが、自分の存在や考え方を知らせ、相手との信頼関係を作る努力も、今後増々必要になってくることを考えると、市民グループのより幅広い活動が求められているといえよう。

附という形での援助が一八グループで協力・援助活動全体の六〇%を占めている。一方、留学生も含め在浜外国人に対して、援助・協力をを行っているグループは九グループだけである。現在、横浜には国費・私費留学生あわせて、三百人近く生活しているが、その多くがアジアからの留学生であり、物価の高い日本での生活には様々な困難があることが指摘されている（安いアパートを見つけない困難さやアルバイトによる生活費の確保など）しかし、これらの問題に協力・援助するグループが非常に少ないのは残念である。横浜に生活する外国人は、良くも悪くも横浜のイメージを母国の人々に伝え、いずれば日本と母国との橋渡し役になれる立場の人たちであるわけで、市民グループの活動だけでなく、横浜市全体の対応が望まれているといえよう。また最近注目され始めている帰国子女の問題に取り組んでいるグループが三つある。

反核・平和を活動の中心にすえたグループはわずか五グループ。今年「国際平和年」の年でもあり、行政・市民あがりの取り組みが期待されている。さらに付け加えるならば、人物派遣による国際協力、海外からの人物招へい、海外での日本紹介イベントなどは全く市民グループの活動の中には見られない。

これは、市民グループの持つ資金的または時間的限界を示すものといえるだろう。したがって、行政として市民グループの持つ得意な面、苦手な面を正しく把握した上で市民グループとの協力を進めてゆくことが大切だといえよう。

②国際交流を始めたきっかけ

これらの市民グループのリーダーの人たちが、国際的な活動をするにいたったきっかけについて見てみよう。直接的体験、間接的体験に分けて、分類したのが表二である。

直接的体験として、海外でのホーム・ステイや青年海外協力隊に参加した体験、在浜外国人との子供の頃からのつきあいなどが国際交流活動を始めたきっかけとなった人は、三〇人で全体の約半数である。一方、間接的な体験としては、既に活動している国際交流グループに入会したり、市や県が開催した国際交流ボランティア育成講座などに参加したことがきっかけとなった人は、二二人で約三分の一ある。この二二人の内「時間があつたから。外に出て自分の人生を生かしたかったから」と考える主婦層（一人）が多いのが目立つ。また、「国際的な仕事を通じて」という人が一人である。これは仕事として国際的な関係に携わったことが、ボランティアとしての活動を行うきっかけともなった人たちである。ま

表一 横浜における国際交流市民グループの活動（複数回答）

①相互理解・友好親善交流を目的とした活動（73グループ）

活動形態（グループ数）	具体的な活動内容
外国人との交流会やパーティー（13）	・家族ぐるみの交流パーティー ・料理を持ち寄りガーデンパーティー ・ソ連の船員との交流（ロシア語を習っている人） ・外国人宅訪問 ・バード・スクールとの交流会 ・留学生とのX'mas Party ・中国留学生との交流会 ・米国日本語研究所の生徒との交流会 ・海外からのお客さんとの交流会 ・スポーツによる交流試合 ・チビツコミニ駅伝 ・国際仮装行列 ・ドンタク
国際理解のための各種講座（12）	・中国語講座 ・ロシア語講座 ・ハンゲル語勉強会 ・英会話勉強会 ・エスペラント勉強会（子連れでもできる） ・各国料理講習会 ・外国人による料理教室の開催（月1回） ・中国料理講座（月1回） ・大極拳講座 ・国際理解講座の開催 ・外国人・日本人同数による理解講座の開催 ・国際理解市民講座の開催
講演会映、画会など（10）	・韓国人からみた日本の講演会 ・在日韓国人・朝鮮人児童の教育の報告会 ・ボリビア海外協力隊の講演会 ・アルジェリア大使の講演会 ・アフリカ理解のための公開セミナー、映画作り ・韓国映画上映会 ・パングラディシユの民衆の生活講演会、映画上映会 ・I.Y.Y. についての講演会、映画上映会 ・アフリカの民衆演劇ワークショップ ・朝鮮、韓国の民話の紙芝居作り
海外についての勉強会（8）	・海外の古典文学勉強会 ・在日外国人問題を知るための勉強会 ・外国人を囲んで母国についての勉強会 ・パーティでの海外事情交換会 ・開発協力の勉強会 ・アジアを考える会 ・海外の文化・教育等についての勉強会 ・ライシャワー“JAPAN”の読書会
海外派遣、スタディーツアー（11）	・海外派遣と現地市民との交流 ・横浜の子供をマイクロネシアに派遣し現地で交流 ・市内小中学生の海外派遣 ・横浜市民の中国訪問と交流 ・市内高校生中国訪問 ・ワシントン地区に視察団派遣 ・韓国訪問ツアー ・横浜青年の海外派遣と現地青年との交流 ・インド・ビルマ・スタディー・ツアー ・アジア学院のキャンプに参加 ・交換留学生の派遣
ホーム・ステイ、ホーム・ビジット（6）	・マイクロネシア人をホーム・ステイ受け入れ ・アメリカ・カナダ・ニュージーランドの友人の家に日本人をホーム・ステイさせる（18人） ・ホーム・ステイ、ホーム・ビジット斡旋 ・日本人の普通の家を見てもらうハウス・ツアー ・土、日にホーム・ステイを実施 ・留学生のためのホスト・ファミリー
日本体験交流（6）	・和紙作り、焼物作りツアー ・皇居見学 MOA美術館見学 ・日本の小学校体験入学 ・日産工場見学 ・フラワー・センター見学 ・ぼん踊り大会
日本文化紹介（4）	・歌舞伎、茶の湯教室・外国人対象の歌舞伎教室 ・文楽上演 ・海外造船協力センターにて、お茶、お花見交流会
文通（3）	・障害者施設相互の作品・メッセージの交換 ・エスペラントによる文通 ・留学生との文通

② 国際協力・援助を目的とした交流（30グループ）

活動の形態（グループ数）	具体的な活動内容
チャリティー・バザー、チャリティーコンサートなどによる資金物資援助（18）	・アメリカン・スクールとのタイアップによるバザー ・チャリティー・バザー ・手作りお菓子のバザー ・ネパール・フェア（物産展） ・ユニセフ・カードの販売 ・ガレージ・セール ・フィリピン・ネグロス島への資金援助 ・難民コンサート ・チャリティー・お茶会 ・チャリティーコンサート ・中国残留日本人孤児の音楽家によるコンサート ・ソ連の音楽家を呼んでのコンサート ・フアツションシヨール ・ダンス・パーティー ・クリスマス・パーティー ・寄附集め ・日本語の本を台湾の大学へ送付 ・世界の飢えのためのプロジェクトに研究費援助
在浜外国人に対する援助（5）	・難民への日本語教授 ・日本に来た人へのガイダンス ・日本語のできない外国人に対する病院への付き添い通訳 ・来浜外国人へのガイド・サービス ・入院している外国人のための古本集めとケア
留学生・石修生への援助（4）	・留学生のための奨学金制度作り ・留学生の就職の世話 ・留学生のための身元保証人 ・研修生の受け入れ先探し
帰国・子女のための援助（3）	・帰国子女のための文庫作りと交流の場作り ・帰国子女に対する日本の教育の閉鎖性に対するとりくみ ・帰国子女に対する理解を深めるための勉強会

③ 反核・平和・人権擁護を主な目的とした交流（6グループ）

活動形態（グループ数）	具体的な活動内容
反核・平和（5）	・医師の立場で核戦争の恐怖をPR ・「原爆の子」のソ連での出版準備 ・戦争への道を許さない女性たちの集会 ・被爆者保護の活動 ・サツポロで語ろうアジアの平和 ・「教科書に真実を」神奈川集会
人権擁護（1）	・良心の囚心への手紙、物資による支援

たそのほか、被爆者の立場での反核・平和の活動や学生運動から婦人、平和の問題へと自分の活動が発展した結果、国際的な活動にかかわった人も四人いる。これは国内的な活動が発展し、国際的な活動にまで広がっていったものである。

外国人との交流パーティー、各国料理教室、映画会、講演会やシンポジウムなどこころ、三年盛んに行われるようになってきたが、これらの行事に参加したことが国際的活動を始めるきっかけとなった人は一人もいない。つまり、これらの行事は参加者に強烈なインパクトを与えることが少ないということができよう。国際交流についての講演会やシンポジウムの場合、その内容が専門的であればある程その参加者の多くが既に何らかの国際的な活動に携わっていることが多いのである。逆に各国の映画会や料理教室、パーティーなど国際交流の入門的な行事の場合には、国際的な活動に携わっていない人の参加者が多い割には、その後国際的な活動に自らかかわってゆくということが期待できないことが多いのもまた実状である。したがって、これらの講演会、シンポジウム、映画会、料理教室交流パーティーなどの限界をはっきり認識した上での取り組みが必要である。

また、行政が主催する国際交流行事に参加したことがきっかけとなった人は四

人である。しかも、それはシンポジウムや交流会ではなく、国際的なボランティア活動を行えるように綿密に計画されたプログラムのもとに実施された講座の参加者のみである。行政がらみでの市民参加の国際交流事業という、講演会、シンポジウム、児童画・作品交換、スポーツ交流などであるが、これらの行事に参加した人たちにとってはあまり心に残らないものが多いということになりそうである。一方、国際交流市民グループに入会したことがきっかけとなって、自から主体的に国際的な活動に参加するようになった人は、一人で行政の場合の四人と比べると対照的である。受身の場ではなく参加型の活動の大切さが伺えよう。さらに付け加えるなら、旅行代理店が企画するバック・ツアーによる海外旅行の体験がきっかけとなった人は僅か一人だけである。海外体験といっても現地の人との交流の質が大きな意味を持つことがわかる。

また、体験の質の面から見ると、「反核・平和運動を被爆者・生活者の立場から展開している」や「日本の教育に矛盾を感じたことから」など、いままでも知らなかった現実が目が開かれ実現のあり方を何とか変革しなければならぬと、心に強く思うことがあって活動に参加していった人たちは一三人(表12で※印)

で約二〇%である。

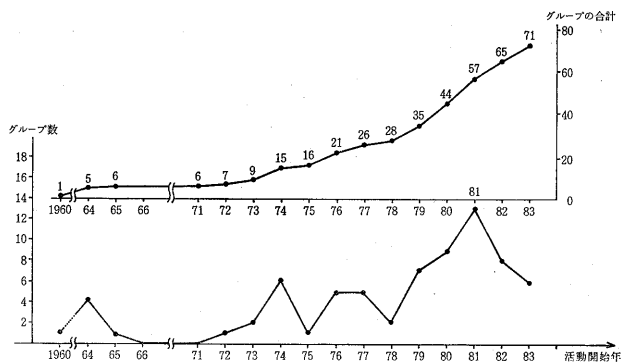
「人と会ったりいろいろな所へ行ったりするのが楽しいから」「夫のアメリカ留学と一緒にいき、とても親切にしてもらい、その恩返しをしたくて」「ミッシェンスクールで教育を受けた。英語で話せる相手がいると楽しい」など、どちらかと言えば外国人との交流の楽しさが活動へのきっかけとなった人たちは残りの八〇%である。そして、前者の場合は相互理解、友好親善の活動よりはむしろ、国際協力・援助の活動および反核・平和、人権擁護の活動を行っている人の比率が高いことがわかる(一三人中九人)。このように、その体験の質により、その後の活動のあり方に違いが表われている。

次に、市民グループのリーダーの人たちがいつ頃から国際的な活動を始めたのかを参考までにみてみよう(図1)。

一九七四年以降急速に活動を開始する人が多くなっているのがわかる。これまで見てきたように、一九七〇年の半ば以降の国際的な相互依存関係の深まりと大いに関係があることがわかっていただけるであろう。

このように、横浜における市民グループの活動は多種多様でありそれぞれのグループが主体性を持って活動しているのである。そして、こうした市民による国際的な活動が活発化するにしたい、横

図一 「国際交流市民グループのリーダーの活動開始時期と人数」



浜の相互信頼型の国際交流は一層厚味を増していくことになる。

横浜は開港から一三〇年近くを経過して、ようやく本格的な市民レベルの国際交流の時代に突入したといつてよいだろう。そして現在、首都圏の中枢機能や国際情報が集積する二十一世紀を展望した国際都市の創造に向けて、MM21プロジェクトをはじめ各種の事業が全市をあげて取り組まれ、横浜は時代から必要とされる国際都市へと発展しつつあるといえるだろう。

主婦であることをいかにして (11)	会に入会して (11)	仕事を通じて (11)	自らの活動の延長として (4)	
① 相互理解・友好親善の交流	<ul style="list-style-type: none"> 勉強した英語を生かしたかった。県の国際ボランティア育成講座に参加。ホームステイを始め、活発に「国際交流」を推進している。 県の国際交流ボランティア育成講座に参加。友人の輪が広がるのがよかつた。 時間があつたから。外に出て、自分の人生を生かしたかつたから。仕事のようなもの。(お金をもらわないだけ)「国際的」なことよりは「福祉」に関心がある。他の国でもやつてきた。 生まれが韓国。市の広報をみて会に顔を出したら、一生懸命やつていてひきこまれてしまった。会では在日韓国・朝鮮人問題を考えている。 小学校の教科書にエスペラントのことが書いてあつて、是非知りたいと思つた。大学のクラブ活動を経て、現在子連れでできる活動としてやつている。 人と会つたり、いろいろな所へ行つたりするのが楽しいから。 娘さんの留学がきっかけ。若い人たちにできるだけ交流の機会を与えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本とミクロネシアの子供たちの交換プログラムに知人がかかわつてた。実際の体験の中から触れ合い、暖かき、友情を得た核廃棄物などの問題を具体的に感じてくれれば。 友人に誘われて座間の People-to-People に参加したのがきっかけ。外国の人々と仲よくし、お互いを理解し合うこと。そのための講座・イベントを実施している。 友人に誘われてメンバーになつた。良い友だちを多くつくりたい。クラブの目的は、世界の人々の間に相互理解の精神を培い発展すること。 会員の人に誘われて加入した。(しかし、目的というほどのものはない) 父のフィリピンでの戦死がそもそものきっかけ。いくつかの国際活動団体に入っているが、今はとくに「かわいく、とくに子供にとつては夢のある」コアラを横浜に呼ぶことに熱心。 	<ul style="list-style-type: none"> ※仕事で国際的なことに従事したことがある。日本が全体として第3世界と互恵平等関係を築いてゆくことを目的(理想)としている。 ※仕事を通じて世界のあちこちに行き、いろいろ勉強させられた。興味の移りかわりは、ヨーロッパ→USAとアフリカ→アジア→在日。 ※仕事で国際交流になつたので...みんな問題のあることを知らない→差別・偏見を生み出す→少しでも知つてもらおう(自分も知りたい)。 英語の教師をしていたが、直接のきっかけは今の仕事に移つたこと。人がいるとついつい世話をしてしまう。外人の方が話していておもしろい。(はつきり言いあえるから。) 華僑として在浜することから、通訳を依頼されたのがきっかけで、現在は横浜と中国の交流を民間レベルで促進する活動に従事している。 仕事で担当になつたので、パツク旅行では味わえない、民衆と直接触れ合う旅行をプログラムしたい。 国際理解講座の担当になつたので..... アメリカに留学したことがある。直接には、今の職についてから。 	<ul style="list-style-type: none"> 青年活動を通して、海外との交流事業(とくに開発教育に力点をのいた)を行なつている。 土地を購入し、その地に西洋劇場を再建したのがきっかけ。外国人との文化、習慣等での相互理解を図りたい。
② 国際協力・援助	<ul style="list-style-type: none"> 暇ができたので、国際交流ボランティア育成講座(市)に参加したのがきっかけ、民間レベルでの外国人との交流を推進したい。 主婦として孤立したくなかつた。友だちをつくりたかつた。何かをしたかつた。現在はインドシナ難民への募金運動をしている。 県の広報で知つたボランティア講座に参加した。(暇だつたから)お互いの考え方、生活の仕方、生き方を伝えあいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 東京YMCAに入会して。 E.S.S (English Speaking Society) に入つたこと。英語をしゃべれる楽しさ。英語によるガイドを通して民際交流を行なう。 ※YMCAのメンバーになつたこと。日本の閉鎖性を問ひ直し、もつと開かれたものにしたい。 ※結婚後、教会に入り、キリスト教の教えに基づき、貧しい人・淋しい人に手をさしのべている。 	<ul style="list-style-type: none"> フィリピンのミンダナオ開発に長年かかわつたことにより、今は日本-アセアン-オーストラリアの自立した3国関係を築きたい。 職場の人事異動で担当になつた。交換留学を通じて幅広い視野で学生を育成することが目的。 	
③ 反核・平和人権		<ul style="list-style-type: none"> ※国際心臓病学会に参加した日本からの先生たちにすすめられて、医師の立場から、人類最後の疫病である核兵器の怖しさをひとりでも多くの人に伝え、核戦争を防ぎたい。 ※日本の教育問題に矛盾を感じたことから。 	<ul style="list-style-type: none"> モスクワ物産展に通訳としてかかわつた。 	<ul style="list-style-type: none"> ※広島生まれ、反核・平和運動を被爆者・生活者の立場から展開している。 ※学生運動→結婚→子供→女性の問題→婦人・平和問題

(※印は本文参照)

表一 2 国際交流活動のきっかけ

	直接的体験 (30)	国際的雰囲気の中で育つ (10)
① 相互理解・友好親善の交流 (46)	<p>・夫のアメリカ留学と一緒に行き、とても親切にしてもらった。日本に来た人たちに恩返しをしたくて……</p> <p>・かつて外国で暮らした時、とても親切にいただいたので、そのお返し。</p> <p>・海外(アメリカ・東南アジア)に行つたのがきっかけ。ホームステイの受入れをしている。「国際青年の年」にもかかわっている。</p> <p>・(昔から行きたくてしかたなかった)アメリカでホームステイをしたのがきっかけ。いろいろな人との出会いの場をつくつていきたい。</p> <p>・高校の時、アメリカへ行きホームステイをした経験がある。好きだから……</p> <p>・外国のこともつとじりたい。</p> <p>・23年間アメリカにペンフレンドを持っている。外国の人と交わり、お互いに協力し合いたい。</p> <p>・子どもの頃から海外へと思つていた、(移住も考えたことがある)海外青年協力隊の隊員としてラオスへ。現在会を中心に活動。</p> <p>・軍隊でインドネシアに行き、そこで青春を過ごした。(戦死した仲間が多い)残留元日本兵対策と日本-インドネシアの友好親善に従事。</p> <p>・市の上海訪問団のメンバーとして上海に行つたのがきっかけ。人と人心と心のふれあいを大切に市民レベルの日中友好活動を展開したい。</p> <p>・ハワイ大学で講演したのがきっかけ。日本の伝統文化を紹介し続けたい。</p> <p>・海外へ行つたのがきっかけ。帰国子女の受入れに熱心。</p> <p>・イギリスで年暮らし、帰国したら子供たちの英語力を保持するための活動をしている。(帰国子女に対する偏見をなくしたい)</p> <p>・ヨーロッパ・アフリカに1カ月の研修旅行に行つたのがきっかけ。学校で(国際理解教育)を展開しつつある。</p> <p>※大分前に東アフリカで暮らしていた時、アフリカ人の友人にたのまれて、差別・偏見を克服するための運動を展開している。</p> <p>・小学校時代の同級生の推せんで果敢として中国に留学した。それがきっかけで国際畑の職を転々とし、現在はユネスコ活動に期待し参加している。</p> <p>・メキシコの婦人世界会議の失敗を見て、日本で同じような会議を開いて成功させたい。市民(とくに主婦)に、国際的なことに関心を持ってもらいたい。</p> <p>・外国からエスペラントの手紙がきたのがきっかけ。現在はエスペラントの輪を広げる活動に従事。</p>	<p>・祖父がイギリス人。7人兄弟姉妹のうち3人がアメリカ。むすこもオーストラリアという自然な環境の中で活動している。</p> <p>・生まれた時から外人とは自然につきあってきた。</p> <p>・ミツシヨンスクールで育つた。英語で話せる相手がいると楽しい。言葉がかかわると自分がかかわるようで卒直にいろんなことを言える。</p> <p>・敗戦体験、中学の時からYMCAの会員、2年間のアメリカ留学体験等を通じて、現在は行政の枠にこだわらず世界との結びつきを図っている。</p> <p>※子どものころ中国人としての差別、圧迫感を感じた。日本人があまりにも中国人や中国のことを知らなすぎる(偏見を持っている)ことから、中日・日中友好のために努力している。</p> <p>・戦時中、父が非国民扱ひされた。中学時代から外国にペンパルを持っていた。そしてアジアでの戦争を現に見たことなどにより今は個人レベルの国際交流のきっかけを提供している。</p> <p>・生まれた時から、外人が回りにいた。とにかく知らないことがまちながいのもの。お互いの実情を広く市民に知らせよう。</p> <p>・元町という「英語で商売する」環境の中で育つ。現在も個人的にも、会のリーダーとしても、横浜の「国際化」を推進している。</p> <p>・戦後のアメリカ人とのつきあいがきっかけ</p>
② 国際協力・援助 (16)	<p>※6年ぶりに帰国した時、会のことをしり参加。「帰国子女」に対する誤った考え方・見方を減らすために少しでも外へ知らせていきたい。</p> <p>・中学校の頃スリランカの子と文通していた。これからも国籍の違う人に会い、違う世界を知りたいし、他の人たちにもそういうチャンスを提供し続けたい。</p> <p>・JAL・PACKでネパールを訪れ(ヒマラヤが見たくて)、ニューライフ・センターを訪問した時に援助したいと思つた。</p> <p>※日本人でありながら、12年ぶりに帰国して、まったく何もしらない外人と同じ気分になる。日本人ボランティアと外国人ボランティアとの間をとりもち、救援活動を行っている。</p> <p>・中学3年の時満州へ渡る。その後も多くの欧米人やアジア人たちとの出会いがあった。日本人の国際感覚を養い、外国との相互理解を深める。</p>	<p>・生まれは、パリ。仕事から海外に行くことも多いし、外人とつきあうことも多い。</p>
③ 反核・平和人権		

(※印は本文参照)

表一 3 戦後横浜の対外交流略史年表①

			模 索 期 (1945年～1965年まで)										区分			
			1965	1965	1960	1961	1960	1959	1958	1957	1954	1952	1949	1947	年代	交流内容
1972	1969	1968	<p>「横浜貿易館」が神奈川県・横浜市・横浜商工会議所により設立 「日本貿易博覧会」が横浜を日本貿易の拠点として興隆させる意図のもとに横浜で開催 インド貿易商の誘致のため商館20棟が建造された 米国サンディエゴ市と姉妹都市提携 開港一〇〇年を記念し「国際貿易会議」開催。東南アジア・中近東より十八か国八十人が参加し、貿易と経済協力について話し合う フランス・リヨン市と姉妹都市提携 米国サンディエゴ市内に常設展示場が設置 西独ハンブルク市にも常設展示場が開設 メキシコ市に機械類を中心にした展示場が設置 サンディエゴ市との間でスポーツ交流・代表団派遣・研修生受入れ・両童画の交換などが行なわれた ボンベイ・オデッサ・バンクーバー・マニラの四市と姉妹都市提携</p>										⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳			
<p>。ソ連・東欧貿易にとりくむ専門商社「横浜通商(株)」を経済界と行政の合同出資で設立 。輸入能力を付与するため「輸入金融制度」創設 。オデッサ市で横浜市主催見本市を開催 発展途上国向けに「機械小型プラント類輸出促進事業」発足 。ウクライナ共和国キエフで横浜市主催見本市開催 。中国上海市と友好都市提携 スポーツ交流・動物交換・市民団相互派遣など実施</p>			<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳</p>										① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳			
経済主導型の国際交流			<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳</p>										① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	<p>対外交流の重点</p> <p>国際交流の型</p>		

表一3 戦後横浜の対外交流略史年表②

基本形成期 (1966年～1979年まで)					区分
1979	1977	1976	1975	1974	年代
<p>。 「横浜上海友好交流促進会議」が設置</p> <p>自治体としては、中国で初めての見本市となり、成約額は五億円に達した</p> <p>。 「日本横浜工業展覧会」を上海市で開催</p> <p>。 ルーマニア、コンスタンツァ市と姉妹都市提携</p> <p>。 横浜国際会議場開設</p> <p>。 「発展途上国工業化協力事業」発足</p> <p>。 在浜外国向け英文情報誌「ヨコハマ・エコー」の発行</p> <p>。 統一ベトナムの誕生。ベトナム、ラオスとの文化交流行事の開催</p> <p>。 海外技術研修生と市民との交流会、在日の各国婦人との集い、環境問題国際シンポジウム、市民の翼友好訪中団の派遣などを実施</p> <p>。 「国際交流ヨコハマ・ムーブメント」開催</p> <p>海外技術研修生と市民との交流会、在日の各国婦人との集い、環境問題国際シンポジウム、市民の翼友好訪中団の派遣などを実施</p> <p>。 「横浜アラブ経済文化交流委員会」が設立</p> <p>アラブ地域との交流、研修生の受入れ、アラブ文化展の開催、アラビア語普及事業など実施</p> <p>。 「第二回アジア卓球選手権大会」横浜で開催。「卓球はアジアを結ぶ」をスローガンに三十の国・地域から四百名の選手団が参加</p> <p>。 経済局貿易観光課を改組して、国際交流課が設置</p>					交流内容
◎	◎	◎	◎	◎	◎
<ul style="list-style-type: none"> ・ 6つの姉妹都市を中心に対外交流が展開された。 ・ 経済交流だけでなく文化交流も盛んに行なわれた。 ・ 相互信頼型国際交流、経済交流文化交流が対等に扱われる交流 					◎ 経済交流 ◎ 文化交流
<p>経済主導型の国際交流</p>					対外交流の重点
<p>相互信頼型の国際交流</p>					国際交流の型

表一 3 戦後横浜の対外交略史年表③

発 展 期 (1979年～現在まで)					区 分
1985	1984	1983	1982	1981	年 代
<p>「アジア地域経済交流横浜会議」開催 香港・インド・インドネシア・マレーシア・フィリピン・シンガポール・スリランカ ・タイの八か国・地域の代表者が横浜に集まり、経済交流・技術協力の見見交換を行 なった(以後二年に一回開催)</p> <p>(財)横浜市海外交流協会(YOKE)設立 ヨークシンポジウムの開催、発展途上国からの技術研修生の受入れ、姉妹都市との都市 間交流、横浜国際会議場の運営等を行なう 海外向け英文情報誌「ザ・ヨーク」の発行</p> <p>。「アジア太平洋地域における自治体の都市づくりに関する横浜国際会議」の開催。横 浜市、国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)人間居住センター(JUNCHS Habitat)との共催</p> <p>。横浜港上海港姉妹港提携 。横浜上海十周年記念事業上海で開催 フランス リオン市において、姉妹都市二十五周年記念横浜フェアを開催。併せて横 浜リオン経済交流促進会議が開催 。横浜市内において「リオンフェア」「ボンベイフェア」の開催 。フィリピンマニラ市において「横浜フェア・日本文化紹介展」の開催</p>					交流内容
<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿</p>					<p>⑧ 経済交流 ⑩ 文化交流</p>
<p>。経済交流・文化交流が華かに行なわれる。 。国際交流の場作りも盛んになる。 。交流地域はアジア地域から環太平洋地域へ拡大</p>					対外交流の重点
<p>経済主導型の国際交流</p>					国際交流の型
<p>相互信頼型の国際交流</p>					

参考文献
 外岡 勲 「横浜市の対外交流」横浜市海外交流協会
 編 『都市と国際化』弘文堂 一九八二年
 外岡 勲 「都市交流の深化」長洲一二、坂本義和編
 著 『自治体の国際交流』学陽書房 一九八
 三年
 (財)横浜市海外交流協会編 『世界の中の横浜・横浜
 の世界』一九八四年
 △財団法人横浜市海外交流協会▽